Akita University

地域における継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築†
ー横須賀市を事例としてー

外池　　智*
秋田大学大学院教育学研究科*

「本研究の目的」も含めて，以下本稿の概要を述べる．本研究は，2009（平成21）年度から推進している戦争遺跡に関する研究[1]，2012（平成24）年度から推進している戦争体験の「語り」の継承に関する研究[2]，2015（平成27）年度から取り組んでいる継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究[3]，2018（平成30）年度から取り組んでいる地域の継承的アーカイブと学習材としての活用に関する研究[4]，そして2022（令和４）年度から取り組んでいる地域における継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築[5]の継続研究であり，その一端を発表するものである．

戦後77年の歳月が経ち，戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に10歳とすれば，もはやその人口は全人口の５％以下となった．こうした状況の中，あの貴重な体験や記憶を残し，継承していこうとする試みが全国様々な地域で，そして多様な方略で続いている．さらに教育現場においても，直接的な戦争体験の「語り」ではなく，そうした継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育[6]」と呼ぶべき実践が次々と展開されている．

こうした現状を踏まえ，本稿では特に地域の戦争遺跡の教育的活用について，神奈川県横須賀市の事例を取り上げ，横須賀市の行政主導による取り組みと地元の学校教育における活用を2019（令和元）年に取り上げた千葉県館山市の取り組み[7]や広島市，長崎市の事例等と比較しながら，その特色を明らかにしていきたい．

キーワード：戦争遺跡，横須賀市，ルートミュージアム

1.　横須賀市の戦争遺跡

全国の戦争遺跡の文化財としての指定・登録については，戦争遺跡保存全国ネットワーク（1997年設立）が毎年網羅的な集計を行っている．2021（令和３）年10月現在で全国で319件の指定・登録があり，その内神奈川県は北海道の42件に次ぐ24件で，全国でも２番目に多い数となっている[8]．

神奈川県の全24件の内，最も多い市町村は今回取り上げている横須賀市で，14件（58.3％），６割ほどを占めている．その横須賀市の文化財での指定・登録の類型では，全14件の内，国指定が２件（14.3％），国登録が９件（64.3％），県指定１件（7.1％），市民文化資産[9]が２件（14.3％）となっている．特に，国指定文化財となっている２件が「東京湾要塞猿島砲台」と「東京湾要塞千代ヶ崎砲台」で，2015（平成27）年に「史跡　東京湾要塞跡」として軍の施設としては日本で初めて国指定史跡になった．ちなみに，「東京湾要塞」は，東京湾周辺の防衛を目的に設置された要塞で，1880年（明治13年）の観音崎砲台着工から建設が始まった首都防衛のための要塞である．三浦半島および房総半島に設置された砲台・海堡で構成され，これらの施設を総称して東京湾要塞と呼んでいる．明治期より建設が始まり，逐次設

2022年12月22日受理
†Satoshi Tonoike*, Constructing "Peace Education for the Next Generation" Using Inherited Archives in Local Communities -A Case Study of Yokosuka City-
*Graduate School of Education, Akita University

Akita University

備を増強しつつアジア・太平洋戦争の終了時まで運用された.

2. 「横須賀再興プラン」と「ルートミュージアム」

⑴ 「横須賀再興プラン」の提起

こうした横須賀市の戦争遺跡の活用について，まず自治体を中心とした取り組みである「横須賀再興プラン」と「ルートミュージアム」について取り上げたい.

「横須賀再興プラン（横須賀市実施計画）」は，現在の横須賀市長である上地克明氏[10]が初めて市長に就任した2017（平成29）年に提起されたものである[11]. 2018（平成30）年度から2021（平成33）年度までの４年間で戦略的・重点的に推進する政策を掲げたもので，まず中長期的な視点でこれから横須賀が目指すべき姿，方向性を市民にイメージしてもらえるようなグランドデザインとして「目指すまちづくりの３つの方向性」を提起した[12].「3つの方向性」とは,「海洋都市」,「音楽・スポーツ・エンターテイメント都市」,「個性ある地域コミュニティのある都市」である. こうした「3つの方向性」を踏まえて，今ある課題の解消を図るとともに，将来を見据えた中で今から重点的，戦略的に取り組んでいくべき政策分野と具体的施策を，以下の４つを「最重点施策」として示した[13].

（柱１）経済・産業の再興
（柱２）地域で支え合う福祉のまちの再興
　～住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるまちの実現～
（柱３）子育て・教育環境の再興（整備・充実）
（柱４）歴史や文化を生かしたにぎわいの再興
　～「観光立市よこすか」の実現～

戦争遺跡の活用に関しては,「（柱４）歴史や文化を生かしたにぎわいの再興～『観光立市よこすか』の実現～」の施策の一環として位置付く. すなわち，地域創生の一環として，地域の観光資源としての活用である. 実は，こうした施策は，既に取り上げた館山市でも見受けられたものである. 2003（平成15）年に刊行された『平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究[14]』において提言された「地域まるごとオープンエアーミュージアム（フィールド博物館）・館山歴史公園都市」である.

⑵ 「ルートミュージアム」という名称について

さて，こうした「横須賀再興プラン」が示された時に同時に提起されたのが「ルートミュージアム」である. 地域の教育資源を“箱もの”の施設として展示するのではなく，現地のあるがままで活用する場合は，館山市の事例の様に「エコミュージアム」と名称される場合が一般的である. エコミュージアムは，1960年代後半に国際博物館会議（ICOM）の初代ディレクターであったアンリ・リヴィエールが提唱したもので,「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と，その自然，文化および社会環境の発展過程を史的に研究し，それらの遺産を現地において保存，育成，展示することによって，当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」と定義されている[15]. 生態学（Ecology）と博物館（Museum）からの造語である.

では，横須賀市で提唱された「ルートミュージアム」とは何であろうか. 2018（平成30）年に横須賀市議会に提起され，その後まとめられた『ルートミュージアム事業計画　計画書[16]』の「用語の定義」では，以下のように記載されている.

> 横須賀市の特徴である，市内に点在する，展示ケースに入らない歴史文化資源を，実際に現地を訪れて見てもらうことを目的とし，施設の機能を分散し，それぞれの施設が連携して運営することを想定した施設タイプです. 中核拠点とサテライト，資料収集・調査研究拠点で構成します[17].

「ルートミュージアム」という名称自体は，横須賀市の造語である. 文化振興課所管の有識者会議の委員から提案があり，市として採用したのが始まりだという[18].「市内に点在する，展示ケースに入らない歴史文化資源を，実際に現地を訪れて見てもらうことを目的とし」とある様に,「ルートミュージアム」のコンセプトは基本的にはエコミュージアムと同様である事が確認できる. しかし,「中核拠点」を設定し，それを核として，いくつかの「サテライト」と結び付けて構成するという点が「ルートミュージアム」の特色であろう. この「中核拠点」と「サテライト」については，後に取り上げる.

⑶ 計画策定の経緯

「ルートミュージアム」の構想は，2012（平成24）年に始まった事が確認できる[19]. この年に，後

Akita University

に「ルートミュージアム」の「中核拠点」となるティボティエ邸（後に詳述）に関わり，「ティボディエ邸再建に関する請願」が市議会定例会において採択された．このティボディエ邸再建に関わり，翌2013（平成25）年には，「軍港資料館等検討部会」が設置された．すなわち，「中核拠点」となるティボディエ邸の再建事業に相まって，横須賀市における「軍港資料館」の在り方が検討される中で「ルートミュージアム」が構想されていったのである．

⑷ 「中核拠点」について

さて，前述した様に，「ルートミュージアム」のエコミュージアムとの相違は，「中核拠点」を基本として「サテライト」を結び付ける構成となっている点である．そして，横須賀市の「ルートミュージアム」の「中核拠点」は，ティボディエ邸である．ティボティエ邸は，横須賀製鉄所副首長であったジュール・セザール・クロード・ティボディエの官舎[20]であり，日本の近代建築技術の原点となった建築物の一つとされている[21]．1869年（明治２）頃に建築され，2003年（平成15）の解体時まで本州最古級の西洋館だった[22]．

⑸ 「サテライト」について

「サテライト」とは，「横須賀に点在する開国から近代につながる歴史や文化の見どころ自然豊かなスポット[23]」の事で，2022年８月現在で66か所設定されている[24]．全66か所の「サテライト」は「近代化遺産サテライト」（31件，47.0％），「自然・歴史サテライト」（27件，40.9％），「横須賀近代化ゆかりの人物」（８件，12.1％）の３つに類型化されている．遺跡や遺物，そして自然物だけではなく，「人物」も「サテライト」に組み入れているところは，横須賀市の特色である[25]．また，半数近くを占める「近代化遺産サテライト」は，31件のほとんどが戦争遺跡である事も確認できる．ただし，他の一般的な地域での戦争遺跡とは違い，横須賀市の場合は幕末期から明治期，そして大正期，昭和戦前戦中期とまさしく「近代化遺産」としての戦争遺跡である事が特色として指摘できる．この点は後に詳述したい．

「ルートミュージアム」では，こうした全66か所の「サテライト」を訪問者が自由に組み合わせて活用するのである．

3. ガイド養成としての継承者養成

⑴ 横須賀市のガイド担当の特色

戦争遺跡については，「モノ」として当時のままの遺跡や遺構を活用するだけではなく，その由来やエピソードを語る「語り部」がいる事で，その戦跡の価値や意味をより深く考える事ができる．これまでの研究でも，広島や沖縄，そして千葉県館山市や長野県長野市松代でもそうした事例を取り上げてきた．ここでは，そうした戦争遺跡に関連したガイド養成としての継承者養成を検討していきたい．

横須賀市の場合，横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課の新野勉氏によれば，「ルートミュージアム」の「サテライト」に関わるガイド活動としては，NPO法人，ボランティア，そして民間企業によるものの大きく３つに類型化できるという[26]．まず，NPO法人としては，代表的なものは「NPO法人よこすかシティガイド協会」である．また，ボランティアとしては，「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」や「猿島公園専門ガイド協会」である．そして，民間企業によるものとして代表的なものは，猿島のガイドなどを手掛ける民間企業のトライアングルである．

館山市の事例と比較すると，館山市の場合は，そのガイド部門に関しては「NPO法人安房文化遺産フォーラム」が中心となり主導的役割を果たしていた．それに対し横須賀市の場合は，「サテライト」によって，NPO法人やボランティア，民間企業等，複数の主体がガイド部門を担当している．館山市がほぼ一本化しているのに対し，「サテライト」により複数の団体が担当しているは横須賀市の大きな特色として指摘できる．

⑵ 千代ヶ崎砲台跡に関するガイド養成

①「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」設立の経緯と目的

さて，ここではまず千代ヶ崎砲台跡に関するガイド養成を取り上げてみたい．千代ヶ崎砲台は，江戸時代の平根山台場跡を中心に建設した砲台で，日清戦争前の1892（明治25）年12月に起工し，1895（明治28）年２月に竣工した[27]．千代ヶ崎砲台は，2015（平成27）年に国指定文化財となった後，翌2016（平成28）年にはその保存活用計画が策定され，続く2017（平成29）年には整備基本計画がまとめられ，2020（令和２）年10月には公開開始が目指されていた[28]．しかし，補助金交付と新型コロナウィルス感

Akita University

砲台間の通路

染症の影響で，その公開は１年後の2021（令和３）年10月となった．

千代ヶ崎砲台跡の公開に際しては，その遺跡の危険性を鑑み，ガイドの常駐が必要であるとの見解から，横須賀市教育委員会生涯学習課のバックアップの下で2020（令和２）年９月に「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」が立ち上げられた[29]．すなわち，「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」の場合は，戦争遺跡に関わる継承的ガイドとしての役割だけではなく，事故を防ぐ等の危機管理も大きな役割として担っているところが他にはない特色である．これは，当該戦跡が整備されてはいるものの砲台跡といった戦争遺跡の特性によるものであろう．

さて，「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」の会長は，後に取り上げる「千代ヶ崎砲台活用ボランティア養成講座」も担当する外川昌宏氏（関東学院大学非常勤講師）である．本来は，前述したように2020（令和２）年10月から公開開始であったが，新型コロナウィルス感染症の影響で，その公開は１年後の2021（令和３）年10月となった．筆者の調査時現在（2022年８月）では，まだ開始されて１年も経っていない事になる．

会の目的は，「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会会則」の第３条に以下の様に示されている．

（目的）

第３条　本会は，千代ヶ崎砲台跡の公開にあたり，来場者に史跡の魅力を最大限に伝え，人権・平和教育等に資するとともに，郷土愛を育み，地域活性化に寄与する活動を行うことを目的とする[30]．

すなわち，目的としては３点，１つ目は「来場者に史跡の魅力を最大限に伝え」る事，２つ目は「人権・平和教育等に資する」事，３つ目は「郷土愛を育み，地域活性化に寄与する活動を行う」事である．２点目の「人権・平和教育等に資する」点は，３点目の郷土愛をはぐくむ事が偏重的ではないための前言であろう．

②「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」の会員の属性

千代ヶ崎砲台に関わるボランティアガイド養成は，2021（令和３）年10月からの公開に向けて2020（令和２）年10月から第１期生の養成講座が開始された．１か月半の養成講座を無事終了し，2022（令和４）年８月現在で横須賀市教育委員会から認定された「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会」の会員は56名で，男性46名（82.1％），女性10名（17.9％）であった[31]．男性が８割以上を占めている事が分かる．例えば，2012（平成14）年度に開始された広島市「被爆体験伝承者」第１期生では，全137名の応募者の内，男性43人（31.4%），女性94人（68.6%）で女性が７割近くを占めていた[32]．女性の応募者が多い傾向にある継承者養成事業の中で，男性が８割以上を占める横須賀市のケースは特徴的である．また年代別にみると，40代（２名，3.6％），50代（２名，3.6％），60代（26名，46.4％），70代（23名，41.1％），80代（３名，5.4％）で，60代と70代で９割近くを占める[33]．広島市「被爆体験伝承者」第１期生の平均年齢は57.1歳で[34]，長崎市「交流証言者」第１期生（2016年度）の応募者の平均年齢は45歳であった[35]．年代別の比較においても，広島市「被爆体験伝承者」事業の第１期生においては，最も多い年代は60歳代で59人（43.1%），次は50歳代で32人（23.4%）で，応募者の内この50代60代で2/3を占めていた．千代ヶ崎砲台跡のボランティアガイド養成は，広島市や長崎市の開始からほぼ10年ほどの年月が経っている事を考慮すれば，ほぼ同世代が参加している事になる．この理由としては，この世代は親が直接の戦争体験を持つ最後の世代である事，また子育てが一段落し，比較的時間の余裕ができた世代である事が考えられる．

③「千代ヶ崎砲台跡活用ボランティア養成講座」のプログラム

ここでは，最新のものとして2022（令和４）年度の第２期生の養成プログラムを取り上げて検討して

Akita University

みたい[36].

今年度，2022（令和４）年度に募集された第２期生の養成講座は，定員を40人として７月20日を締め切りとして募集された．応募人数は24人であった．「講座プログラム」について，養成期間は８月３日（水）から９月17日（土）のほぼ１か月半で全６回の講座であるが，最後の第６回は実質的に修了試験であるので，実際の講座としては５回である．８月は毎週水曜日に，９月は土曜日に開催され，１回の講座時間は第５回（9/10）の「現地見学」や第６回（9/17）実質的な修了試験を除けば１時間半ずつである．講師の担当は，ほぼ横須賀市教育委員会生涯学習課で担当している．

プログラムの内容構成は，まず基礎的知識として前半の３回分が充てられている．すなわち，１回目に千代ヶ崎砲台跡の立地である「浦賀のまちと歴史」といった歴史的背景，２回目に千代ヶ崎砲台跡を含む「東京湾要塞跡」について，そして３回目には実際のガイド対象である千代ヶ崎砲台跡そのものについて「千代ヶ崎砲台跡の整備と解説のポイント」である．そして，５回目では現地での実習になり，６回目には「効果測定」として実施的な修了試験という構成になっている．ちなみに「効果測定」はマークシート方式の選択式テストで基礎的な知識を問うものと自由記述となっている[37]．これまで取り上げてきた広島市や長崎市，沖縄といった事例とはやはり戦争遺跡の規模も内容もかなり異なるので，その継承者養成の規模が違うのは当然であろう．「千代ヶ崎砲台跡活用ボランティア養成講座」の場合は，かなりコンパクトでシンプルな構成になっている事が指摘できる．例えば，広島市「被爆体験伝承者」育成事業の場合は３年間の養成期間で，特に初年度にあたる2012（平成24）年度のプログラムは，７月から翌2013（平成25）年１月までの間に全13回の研修が実施された[38]．また，長崎市「『語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）』推進事業」の場合[39]はほぼ半年，東京都国立市の「くにたち原爆体験伝承者育成プロジェクト」の場合[40]は１年２カ月等，その養成地域によって養成期間についてはかなりばらつきがあった．これらと比較すると，「千代ヶ崎砲台跡活用ボランティア養成講座」の場合は，必要最低限の体系化されたプログラムを構成し，ボランティアガイド養成に取り組んでいるといえる．

さらに注目すべきは，実質的に“シナリオ”が用意されている事である[41]．千代ヶ崎砲台跡のレイアウトに合わせて，この地点ではこうした話，この地点ではこうした話といったガイドの“シナリオ”が用意されており，受講者はそれを習得することが求められている．実は，こうした手法は南風原町「南風原平和ガイド養成講座」でも見受けられた手法である[42]．先輩のガイドの傍らにいて，実際のガイドを繰り返し聴取することで実践的なスキルを学んでいく方法はひめゆりの「説明員」の場合と同様の手法だが，その前提として，“シナリオ”があり，まずその“シナリオ”に基づいてガイドの流れを習得するのである[43]．賛否はあろうが，ガイドによって語られる説明の“ズレ”を極力なくそうとする工夫の一つであろう．

⑶　猿島砲台跡に関するガイド養成

①猿島と猿島砲台跡

一方，同じ2015（平成17）年に国の指定文化財となった猿島砲台跡は，千代ヶ崎砲台跡の起工より11年早い1881（明治14）年11月に起工し，1884（明治17）年６月に竣工した．その後，砲台の廃止･増設，観測所等の建設を経たが，1923（大正12）年９月１日の関東大震災により大きな被害を受け，1925（大正14）年７月には第三海堡等と併せて除籍された[44]．

この猿島砲台跡がある現在の猿島は，横須賀市により都市公園として整備され，「猿島公園」として横須賀市民のみならず多くの来園者が訪れる施設となっている．三笠公園に隣接する三笠桟橋からは，前述した民間企業のトライアングルが運営する猿島行きの船が１時間毎に出港している．島内では，バーベキューや自然観察なども整備され，いわば総合的なレジャー施設となっている．後に詳述するが，近

砲台間の通路

Akita University

隣の小中学校においても，「総合的な学習の時間」等で毎年活用されている場所である．千代ヶ崎砲台跡地が，いわば戦争遺跡に特化した遺跡であるのに対して，猿島砲台跡地は対照的である．

②猿島砲台跡のガイド養成のプログラム

猿島砲台跡のガイド養成は，当初，横須賀市の公園部局が主導し，生涯学習課文化財係の職員が講師として歴史分野を担当した．その後，現在は市から独立し，新規ガイド募集や事業の実施は，猿島公園専門ガイド協会の独自の運営として進められている．ガイド養成の開始は，千代ヶ崎砲台跡のガイド養成より10年以上早い2009（平成21）年からであった．

最新の2022（令和４）年度第６期生におけるガイド養成のプログラムを千代ヶ崎砲台跡のガイド養成と比較すると，まず養成期間はほぼ２カ月であるが，回数がほぼ倍の10回で構成されている事が分かる[45]．また，その内容の違いとしてまず指摘したいのは，フィールドワークやモニタリング等，実地での実習の多さである．千代ヶ崎砲台跡ガイド養成では第５回の「現地見学」のみであったが，猿島砲台跡ガイド養成の場合は，早速第２回目に「猿島フィールドワーク」として「ガイド体験」を実施し，さらに第６回目に「猿島の自然②」，第７回目に「猿島の自然③＋模範ガイド」，第８回目に走水地域のフィールドワークと実質第10回の修了試験を除いた全９回の内，半数近い４回分を実地での実習に充てているのである．こうした，いわば体験重視型のカリキュラム構成は，猿島砲台跡ガイド養成の特色として指摘できる点である．加えて，猿島の場合は第９回目には「ガイドテクニック」や「ガイドマナー」に関する講座も用意されており，やはり観光の視点を重視している事が見て取れる．前述した様に，千代ヶ崎砲台跡は，いわば戦争遺跡に特化した施設であるのに対して，猿島砲台跡は総合的な観光公園であるので，ガイド養成のカリキュラムにも史跡の特色が反映されているのである．

4.　近隣諸学校における戦争遺跡の活用

さて，ではこうした自治体の取り組みに対して，学校教育の中ではどのように戦争遺跡を活用されているのであろうか．ここでは，まずこれまでの広島市，長崎市，沖縄県，そして千葉県館山市，長野県長野市松代の事例の様に，まず市や県の教育委員会にアプローチし，その推薦による地元の学校を取り上げ，地域の教育資源を活用した教育実践を内容構成論，教材論の視点から検討したい．

⑴　馬堀小学校における取り組み

①立地の特色

馬堀小学校は，1889（明治22）年に創設され，終戦を迎えるまでに３万人の将兵を輩出したとされる陸軍重砲兵学校跡に立地しており，学校の近隣には1968（昭和43）年に重砲校遺跡顕彰会による「碑文」が刻まれた石碑も設置されている．馬堀小学校は，戦後1951（昭和26）年に開校するが，開校時にはこうした明治時代に建設された陸軍重砲兵学校の建物をほとんどそのまま使用しての開校だった[46]．

②学校独自の副読本の活用

さて，こうした馬堀小学校では，３年生の社会科で身近な地域理解の単元の中で学区探検を実施している．学区探検で近隣地域を探索すれば，必然的にこうした陸軍重砲兵学校に関わる石碑やその痕跡等に触れる事になる．また，社会科での地域学習では足りないので，総合的な学習の時間とも連関して，地域の教育資源を取り扱っているという[47]．

こうした社会科や総合的な学習の時間での地域学習においては，基本的に教科書ではなく副読本が活用されるが，馬堀小学校の場合は，創立50周年を記念して作成された学校独自の副読本（横須賀市立馬堀小学校編『まぼり　創立50周年記念・副読本』（横須賀市立馬堀小学校，2001年），全67頁）を活用している点に特色が見出せる．

戦争遺跡を含む学区探検は，副読本との関連でいえば，「1．わたしたちの町」の「1．屋上から見た町のようす」や「2．町のたんけん」の単元の中で実施されている．しかし，この副読本の内容構成においては，特別に地域の戦争遺跡を活用する内容が設定されていない事も確認できる．陸軍重砲兵学校との関連は，「2．学校のうつりかわり」の「1．校舎や施設のうつりかわり」「⑴馬堀小学校の誕生」に記載があるのみである．

ちなみに，田戸小学校でも学校独自の副読本を作成している．横須賀市立田戸小学校編『創立70年記念・副読本　わたしたちのまち田戸』（横須賀市立田戸小学校，1991年）（全150頁）で，やはり創立70年を記念して作成されたものである．

③総合的な学習の時間での取り組み

さて，こうした取り組みの内，第３学年における

Akita University

総合的な学習の時間の年間指導計画は，稿末の資料１の通りである．

「単元で育てたい資質･能力」の「知識及び技能」に，「馬堀の町には，豊かな自然環境があり，社会環境（歴史的な文化）が存在することがわかる」と示されている様に，社会環境の一環として歴史を位置付け，陸軍重砲兵学校関係遺跡を取り扱っている事が分かる．具体的には，前述した石碑や学区探検で行く馬堀自然教育園の中にある「弾薬庫」等の痕跡である．

また，「単元の概要」に「コロナ禍の中で活動は制限されるが，可能な限り，探検＝現地に行く，人と会ってインタビューする」とある通り，新型コロナウィルス感染症の影響で，地域学習の活動も制限されるものの，探検を通じた実地での学習を重視して展開されている事が見て取れる．

さらに，最終的には「人と関わり，調べたことを発信する力を育んでいきたい」とある様に，「調べたことを発信する」といった行為形成を実行する事で，社会参加的活動を展開しようとしている事が分かる．

さらに，３年生時だけではなく，４年生での総合的な学習の時間でも「地域と水源地の関係を知ろう」の単元で走水水源地でのフィールドワークを実施しており，やはりその際に近隣の走水砲台跡を取り扱う事になっている．ちなみに，こうした走水砲台跡や走水水源地は，前述した横須賀市の「ルートミュージアム」の「サテライト」にも選出されている戦争遺跡である．

⑵　神明中学校における取り組み

次は，神明中学校の事例を取り上げたい．神明中学校では，総合的な学習の時間を中心にして，３年間での体系的取り組みの一環として，地域の戦争遺跡を活用している．３年間のテーマは，「SDGsへの挑戦！～人と共に，幸せに生きる人を目指して～」である．担当の熊谷健太郎教諭によれば，その取り組みは2020（令和２）年から取り組まれ，当時の小板橋貴久校長の指示を受けて，それまでばらばらだった取り組みを体系的に整理したものだという[48]．巻末の資料２は，熊谷教諭が作成した３年間の計画である．

総合的な学習の時間を中心に，道徳と特別活動，そして社会科と連携しながら構成されている事が見て取れる．さらに，それぞれの単元の《》の番号に見る様に，掲げたテーマ通りにSDGsとの関連を位置付けている事が確認できる．

特に戦争遺跡については，２年生の６月時の「【総】社会科／地域学習（三笠・猿島）」の単元で取り上げられている．地理的分野の地域調査の活動として，戦艦三笠や猿島でのフィールドワークを取り入れているのである．すなわち，やはり地域調査の一環として戦争遺跡を活用している事が指摘できる．

また取り上げたいのは，活動の中心の一つに「命と共災の学習」が位置付けられている事である．１年時から３年時にかけて６単元分設定されている．これは，熊谷教諭自身が宮城県の南三陸町の出身であり，東日本大震災との関連を総合的な学習の時間の時間の中に位置付けたかったからとの事であった[49]．この活動の中では，実際に南三陸町の語り部によるオンラインの講話（２年次４月実施）や宮城県の石巻市立大川小学校の佐藤教諭の講話が設定されている．熊谷教諭によれば，神明中学校の生徒達は挫折に弱い，そして自立に向かわせたいとの思いがあり，災害とともに歩くたくましさを身に付けてほしい，そして命のはかなさを学んでほしいとの思いから，「命と共災の学習」と名付けたという．直接的に戦争の題材を扱ったものではないが，命の大切さを取り扱う点からは，これまで取り組まれてきた平和教育実践でいえば，いわば間接的平和教育といえる．

さらに，３年生の６月に実施される修学旅行では，2021（令和３）年では京都だった対象地が2022（令和４）年からは広島方面となった．広島平和記念資料館も行程の一つに取り上げられており，「命と共災の学習」との連関を図っているという．

熊谷教諭によれば，こうした「SDGsへの挑戦！～人と共に，幸せに生きる人を目指して～」は，まさに生徒達に“やってみる”ことを大切に“挑戦”してほしい，３年間でいかに行動できるか，トライ＆エラーを大切にしてほしい，そして人と人とのふれあいを大切にしてほしいとの思いから構成した内容であるとの事であった[50]．すなわち，コロナ禍で活動が制限されつつも，あるいは制限されている中だからこそ生徒達の体験，実際の行為形成を重視した内容構成となっているのである．

⑶　常葉中学校における取り組み

最後に，常葉中学校の事例を取り上げたい．常葉中学校では，総合的な学習の時間において，特に１年生の地域理解活動の中で猿島でのフィールドワー

Akita University

クを実施している．また，中学校において副読本を活用し戦争遺跡を取り上げている．

①総合的な学習の時間での取り組み

まず，テーマは「自然体験学習・進路学習を中心に，生きる力を育む」とされ，「単元のねらい」は，以下の様に示されている．

> 自分たちの住む地域の食や景観，自然等についての探究的な学習を通して，地域の資源を生かしてその活性化に関わる人々の思いや願いを理解するとともに，地域活性化のために自分たちができることについて必要な情報を収集したり，実現可能な取組になるように，他の地域と比較したり，アイデアを焦点化したりして考え，進んで関わろうとする態度を育てる[51]．（下線筆者）

「地域の資源を生かしてその活性化に関わる人々の思いや願いを理解する」や「地域活性化のために自分たちができること」と示されている通り，「地域活性化」が中心的目的になっている事が分かる．

その具体的取り組みとして，特に１年生の「各学年の大まかな取り組み」としては，「体験学習，大豆栽培・収穫，みそ作り，進路学習，横須賀商工会議所出前授業[52]」が示されている．その概要は，資料３の通りである．

４月に「猿島校外学習」が設定されている事が確認できる．実際の活動としては，１時間半ほどでのウォークラリーとなっている[53]．前述した様に，猿島砲台跡は戦争遺跡のみならず総合的な観光施設として横須賀市や民間企業も力を注いでおり，横須賀市の地域活性化の中心の一つである．「ルートミュージアム」の「サテライト」にも位置付いている．上記の「ねらい」にも示されている通り，「地域活性化」の対象としては格好の対象であると言える．また，立地においても，常葉中学校は猿島へのフェリーが出る三笠桟橋に最も近い学校となっている．

戦争遺跡の活用の視点からみれば，やはり平和教育の文脈として取り扱っているのではなく，地域理解や地域活性化の視点での取り扱いである事が指摘できる．ただし，ワークシートには「3．猿島・横須賀について本当に調べたいことは何だろう？（課題設定）」として調べ学習が設定されており，仮に猿島砲台跡について課題として設定すれば，より深い学習が進められるように構成されている[54]．

②副読本の活用

資料３　横須賀市立常葉中学校における総合的な学習の時間の１年生の内容構成

	内容
4月	・ガイダンス ・猿島校外学習（PAAの代替）
5月	・大豆の種まき
6月	・農園の準備
7月	⇩
8月	
9月	
10月	
11月	・大豆の収穫 ・大豆を乾燥
12月	⇩
1月	・味噌づくり
2月	・横須賀商工会議所出前授業（キャリア教育講演会「・働くことについて）
3月	・横須賀商工会議所出前授業（ポスターセッション・ディスカッション） ・お礼状作成・郵送

・横須賀市立常葉中学校工藤圭介教諭からの提供資料「第1学年　総合的な学習の時間年間計画」（2022年8月3日の学校訪問による調査時）による。

前述した様に，横須賀市では独自に中学校での副読本を作成しており，実際の社会科の授業の関連する単元で活用されている．『中学校社会科副読本　郷土横須賀』は，1967（昭和42）年にその初版が刊行された[55]．作成の目的として，「まえがき」には以下の様に示されている．

> 皆さんが，中学校の社会科を学習するうえで，郷土である横須賀を知ることは，大変重要なこととなります．それは，地理や歴史の学習が，県～日本～世界と広がったとしても，絶えず郷土との関係でいろいろと考えていくことが必要だからです．すでに，小学校のときに横須賀については，学習しましたが，さらに深く学ぶための資料として，この「郷土横須賀」を編集いたしました[56]．（下線筆者）

周知の通り，小学校の内容構成は，身近な地域－市区町村－県－国－世界と言う様に，学年が進むに合わせて同心円的に拡大してく構成になっている．しかし，中学生になったとしても「絶えず郷土との関係でいろいろと考えていくことが必要」として，学習者自身の身近な地域との関りを重視している事が分かる．こうした着想は，昭和戦前期の郷土教育においても見受けられた考えである[57]．同心円的に学習内容を拡大していくだけではなく，拡大しつつも絶えず身近な地域との連関，身近な生活との連関を考察していくのである．中学校における副読本は，神奈川県内では決して珍しくはないとの事[58]であるが，全国的に見ればやはり特色ある取り組みであろう．

実際の執筆者は，常葉中学校教諭の工藤圭介氏をはじめ，大上悠氏，早川千秋氏，古市聖則氏の横須賀市内の中学校教諭で，その総括を横須賀市教育委

Akita University

員会事務局学校教育課社会科教育担当の直島和也氏が担当した．

最新版の2022（令和４）年に刊行された副読本は，「あとがき」までで99頁であり，その内容は中学校社会科の分野構成に合わせて，地理，歴史，公民の３分野制の構成になっている．また，それぞれの分野における内容構成については，地理的分野では，地形・気候，横須賀の地域区分，地図，人口，産業となっており，地誌的でスタンダードな内容構成になっている．また，歴史的分野は，古代から現在までと基本的には通史で編纂されている．公民的分野は，政治，経済，福祉，そして地域の課題とこれまたスタンダードな編成になっている．

5. 結語

以上，本稿では地域の戦争遺跡の教育的活用について神奈川県横須賀市の事例を取り上げ，横須賀市の行政主導による取り組みと地元の学校教育におけ

資料１　横須賀市立馬堀小学校３学年の「総合的な学習の時間」年間指導計画

令和　３年度（２０２１年度）　〔馬堀小〕学校　第３学年１・２組

「総合的な学習の時間」年間指導計画　　担当者　中村晴美

単元名	
みんな大好き　馬堀の町　もっともっと知りたいな	
単元目標	
馬堀の町の良いところを見つける活動を通して「地域」の「特色」や「人」などを見つめなおし、興味や関心のある所について調べ、効果的にまとめ発信していく。	
単元で育てたい資質・能力	
知識及び技能（概念的な知識）	・馬堀の町には、豊かな自然環境があり、社会環境（歴史的な文化）が存在することが分かる ・馬堀の町の良いところを探す活動を通して、地域の良さや伝統にかかわる人々の思いを知る。
思考力・判断力・表現力等	・身の回りの自然環境や社会環境と関わる活動を通し、自分の興味関心に基づくテーマを設定し、その解決方法を考える。 ・体験をし人との関わりの中でテーマに沿った情報を集める。 ・調べた情報を自分なりの方法でまとめ、表現する。
学びに向かう力、人間性等	・テーマを選び、その解決に向けて粘り強く取り組もうとする。 ・自分や地域の良さに気づき、良さを大切にしながら地域の中でより良く生活していこうとする。
単元の概要（児童生徒の実態、教材の価値、中核となる学習活動等）	
・本来であれば、２年生の時に生活科の学習で「町探検」を経験しているのだが、昨年度の休校・コロナ禍での校外学習の未実施により、馬堀に住んでいながら、地域のことで知らないことがたくさんある。そこで、社会の「わたしたちの大好きな町」の学習から自分たちの生活する地域を「自然」「町」「人」の分野に分け、調べる活動を行い、その中から地域の特徴を知り、自分の調べたいテーマに沿って、調べたり体験することによって「地域」に対する愛着と知識をもたせていきたい。コロナ禍の中で活動は制限されるが、可能な限り、探検＝現地に行く、人と会ってインタビューする、自分で疑問に思ったことをいろいろなお不法で調べる活動を通して、人と関わり、調べたことを発信する力を育んでいきたい。	

単元の展開

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
小単元名・主な学習活動・予定時数　等	オリエンテーション	馬堀のまち探検（２０時間）	・「調べ隊のマークを作ろう」 ・テーマを見つけよう ・不思議だな・知りたいな	→	・解決の仕方を考えよう	馬堀のよいとこミッケ隊　パート１（３０時間） ・調べてみよう	・調べに行こう	・地域の人のお話を聞こう ・まとめよう	馬堀のよいとこミッケ隊　パート２（２０時間）	・知らせよう	・自分たちができることを考えよう	
各教科等との関連・外部の教育資源の活用・異校種との連携や交流　等		◎社会「わたしたちの大好きなまち」 ◎理科「自然の観察をしよう」				◎国語「仕事の工夫見つけよう」 ★馬堀自然教育園の学芸員さんのお話		★地域に住む外国の方の話を聞こう ★警察の方の話を聞こう ★商店街の方のお話を聞こう ★町内会長さんのお話	★お祭りに参加している人のお話			

資料２　横須賀市立神明中学校における総合的な学習の時間の計画

緑学年　特別活動（総合・道徳）３年間計画　　２０２２．４．４　熊谷
緑学年の総合学習３年間のテーマ（スローガン）
『SDGsへの挑戦！～人と共に、幸せに生きる人を目指して～』
＊実践したものと実践予定（随時変更）　＊《 》SDGs該当番号

	1年次（2020年）	2年次（2021年）	3年次（2022年）
4月		【総】『命と共災の学習②』 オンライン講演会（南三陸） 《8》《9》《11》《13》《14》《15》《16》 【総】進路学習	【総】修学旅行の取り組み 《11》《14》《15》《16》 【道】仲間・文化について 【総】進路学習・避難所運営組織づくり
5月	【総】宿泊研修（金沢八景）→中止	【総】『花の国ボランティア』②植え付け《11》《15》 【総】マナー講座（オンライン） 《5》《8》《9》《11》 【道】福祉について	【総】修学旅行の取り組み 《11》《14》《15》《16》 2年延期分の有明EW 防災・環境・街づくりキャリア教育 《4》《9》《10》《11》《13》《16》《17》 【道】進路学習 【道】自然・地域について
6月	【総】『服の力プロジェクト』事前学習	【総】『パラリンピック』①事前学習 《3》《4》《5》《8》《10》《11》《16》《17》 【総】社会科／地域学習（三笠・猿島） 《4》《11》《14》《15》	【総】修学旅行（広島・愛媛） 《11》《14》《15》《16》 国際平和・SDGs学習 服のチカラプロジェクト・フードバンク 【総】進路学習「仕事まなびジュニア」
7月	【総】『服の力プロジェクト』ゲスト講義 《1》《2》《3》《10》《12》《17》 【総】『服の力プロジェクト』広告づくり 《1》《2》《3》《10》《12》《17》 【特】シエスタ《7》《13》	【総】『パラリンピック』②福祉体験・講義 《3》《4》《5》《8》《10》《11》《16》《17》 【総】『パラリンピック』③お礼状 【特】シエスタ《7》《13》	【総】修学旅行の成果発表会 《11》《14》《15》《16》 【総】進路学習・ユニセフの取り組み国際平和 【特】シエスタ《7》《13》
8月	【総】『服の力プロジェクト』地域で回収呼びかけ 《1》《2》《3》《10》《12》《17》	【道】いじめについて 【総】いじめ防止の取り組み	【総】進路学習
9月	【総】『服の力プロジェクト』メッセージカード作成 《1》《2》《3》《10》《12》《17》 【特】シエスタ《7》《13》	【総】体育祭での福祉競技＆防災競技 【総】『花の国ボランティア』③鑑賞《11》《15》 【総】文化発表会へ向けた取り組み《3》《5》 【特】シエスタ《7》《13》	【総】体育祭での福祉競技＆防災競技 【総】進路学習 【特】シエスタ《7》《13》 【総】文化発表会へ向けた取り組み《3》《5》
10月	【総】『服の力プロジェクト』集計 《1》《2》《3》《10》《12》《17》	【総】【道】MMT（商工会議所） 《5》《8》《9》《11》 【総】『職場体験』①事前学習 《1》《3》《4》《5》《8》《9》《11》《12》 【総】文化発表会での学年発表《3》《5》 【道】働くことについて	【総】進路学習 【総】文化発表会での学年発表《3》《5》
11月	【総】『花の国ボランティア』①除草《11》《15》	【総】『職場体験』②実践 《1》《3》《4》《5》《8》《9》《11》《12》	【総】進路学習 【総】【道】夢MMT（商工会議所） 《4》《5》《8》《10》《16》《17》
12月	【道】小学校の先生に成長を伝えよう！	【総】『職場体験』③発表 《1》《3》《4》《5》《8》《9》《11》《12》 【総】進路学習 【総】フィールドワークの取り組み 《4》《6》《7》《9》《11》《13》	【総】進路学習
1月	【総】職場体験へ向けて　→延期	【総】フィールドワーク （お台場防災公園＆未来科学館）→延期 《4》《6》《7》《9》《11》《13》 【道】防災について	【道】ふるさとについて 【道】家族について 【総】地域へ何ができるか
2月	【総】『キャリアパスポート』作成 【総】『国総研』見学　→延期	【総】『国総研』見学（津波） 《7》《9》《11》《13》《14》 【総】【道】 『命と共災の学習』③事前学習（熊谷） 《8》《9》《11》《13》《14》《15》《16》	【道】家族に感謝を伝えよう！ 【総】【道】 『命と共災の学習』⑥事前学習（熊谷） 《8》《9》《11》《13》《14》《15》《16》 【総】卒業遠足（金沢八景）水族館と野外炊飯 《7》《8》《9》《14》《15》
3月	【総】【道】 『命と共災の学習①』事前学習（熊谷） 《8》《9》《11》《13》《14》《15》《16》 【総】【道】 『命と共災の学習②』 オンライン講演会（南三陸）→延期	【総】「命と共災の学習』④避難所運営訓練 《10》《11》《13》《16》 【総】【道】『命と共災の学習』⑤講演会 （写真家・浅田氏） 《8》《9》《11》《13》《14》《15》《16》 【総】修学旅行へ向けて 《11》《14》《15》《16》	【総】低学年または保育実習 【総】【道】 『命と共災の学習』⑦（女川・佐藤氏） 《8》《9》《11》《13》《14》《15》《16》 【総】【道】SDGSまとめ《1》～《17》 【道】生き方について考える

・横須賀市立神明中学校熊谷健太郎教諭からの提供資料（2022年8月3日の学校訪問による調査時）より作成。

Akita University

る活用を千葉県館山市の取り組みやこれまでの広島市，長崎市等の事例と比較しながら，その特色を明らかにしていきた．

最後に２点，すなわち他には見られない横須賀市の戦争遺跡の特色と学校教育における戦争遺跡の取り扱いの多様性について述べておきたい．

まず１点目の，横須賀市の戦争遺跡の特色についてである．これまで取り上げてきた広島市や長崎市，沖縄，千葉県館山市，長野市松代の事例は，やはり先の大戦に直接関わる遺跡であり，学校教育においても社会科や総合的な学習の時間を中心として，単元の学習と連関して取り扱われていた．しかし横須賀市の場合，多くの遺跡が幕末や明治の近代化の時代から創設されてきた遺跡であり，その意味で“戦争遺跡”と言うよりは，むしろ“近代化遺産”というのに相応しいものであった．実際に，本研究で特に取り上げた千代ヶ崎砲台跡や猿島砲台跡は，確かに幕末から明治の創設当初では，東京湾防御として機能を果たしたが，その後日清･日露戦争，大正期，そして昭和期と変遷するにつれて，兵器の向上や変遷に合わせた増設や改築が行われており，昭和期の航空機の時代になると，もはや東京湾防御の砲台としての機能は失われていった．そうなると，こうした砲台跡の遺跡は，いわば砲台という建築物の近代化の歴史である[59]．特に15年戦争，もしくはアジア太平洋戦争に関連した戦争遺跡としての取り扱いというより，日本の建築物の近代化の足跡を確認できる遺跡が，横須賀の戦争遺跡の特色と言える．

２点目は，学校教育における戦争遺跡の取り扱いの多様性についてである．前述した様に，横須賀市における戦争遺跡の近隣諸学校では，平和教育の文脈というより，身近な地域理解や地域活性化，命の教育等の文脈として取り扱われていた．こうした戦争遺跡の活用は，横須賀市のみに見られるものではなく，既に秋田市においても，筆者がかつて土崎空襲[60]の近隣諸学校における取り扱いを調査した時にも見受けられた視点であった[61]．学校現場における題材の柔軟な取り扱いやアイデアには，逆にこちらが感心させられる場合が多いが，今回の調査でもそうであったと言える．しかし，戦争遺跡の活用が，本来の平和教育から拡大すればするほど，やはり戦争遺跡とは何か，さらに平和教育とは何かが問われる事になる．ヨハン・ガルトゥングが構造的暴力を提示した事で，平和教育の拡大解釈が始まり，平和教育とは何かが本質的に問われる事となった[62]．戦争体験者が刻々と減少する今日，「ヒト」から「モノ」へと戦争遺跡は益々重視されつつあるが，その取り扱いはやはり安易に考えられるものではなく，その本質を問う議論が必要とされるだろう．

---

1 2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：21530972）．その内容は，拙著『2009-2011年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用』（暁印刷，2015年）としてまとめている．

2 2012-2014年度科学研究費補助金基盤研究（C）「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」（課題番号：24531174）．その内容は，拙著『2012-2014年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』（2015年，暁印刷）としてまとめている．

3 2015-2017年度科学研究費補助金基盤研究（C）「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」（課題番号：15K04475）．その内容は，拙著『20015-2017年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』（2018年，八郎潟印刷）としてまとめている．

4 2018-2020度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：18K02606）．その内容は，拙著『2018-2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　地域における継承的アーカイブと学習材としての活用』（2021年，八郎潟印刷）としてまとめている．

5 2022-2024度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における継承的アーカイブを活用した『次世代の平和教育』の構築」（課題番号：22K02622）．

6 「次世代の平和教育」については，前掲註３の報告書の内，「Ⅲ　次世代の平和教育」（121-232頁参照）にまとめている．その特色として，以下３点を指摘した．

（1）継承的アーカイブの活用

（2）戦後の平和希求活動への着眼

Akita University

（3）目的的平和教育から方法的平和教育へ

[7] 前掲註4報告書の内，「Ⅳ　地域における開発的アーカイブ－館山市の事例－」（161-200頁）参照.

[8] 戦争遺跡保存全国ネットワーク事務局編「戦争遺跡保存全国ネットワークニュース」№52（戦争遺跡保存全国ネットワーク事務局，2022年），4-12頁参照.

[9] 横須賀市では，文化財には指定されていないが，市民生活に密着し，広く親しまれ，将来も大切に保存する必要のあるものを市民文化資産に指定している．横須賀市HP「市民文化資産について知りたい」（https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2120/faq/2304.html）参照．2022年７月14日閲覧.

[10] 2022年現在は２期目である．因みに，タレントの上地雄介の父である.

[11] 横須賀市文化スポーツ観光部観光課の沼尻正昭氏からの電話による聞き取り（2022年６月15日）及び横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課の新野勉氏からの電話による聞き取り（2022年６月29日）において確認している.

[12] 後に詳述するが，この「横須賀再興プラン」は，横須賀市の中学校における社会科副読本である横須賀市教育委員会編『中学校社会科副読本　郷土横須賀』（横須賀市教育委員会，2022年）においても「公民的分野」「Ⅳ　横須賀市民のくらし」の「1　市の行政組織とその働き」の内，「（1）市の政策」において，１頁分をかけて取り上げられている.

[13]「資料２」として，以下のURLに示されている資料である.
https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2120/g_info/documents/66th_02.pdf.2022年６月15日 閲覧．やはり，上地市長が就任した2017（平成29）年に第１期実施計画として示された資料の一部であるとの事である．前掲註11の聞き取りによる.

[14] 地方自治研究機構編『平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究－館山市における戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究－』（千葉県館山市企画部企画課，2003年），全183頁.

[15] 文部科学省HP（www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/2019年７月11日閲覧）参照.

[16] 横須賀市『ルートミュージアム事業計画　計画書』（横須賀市，2018年），全67頁．横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課の新野勉氏からの提供資料（2022年６月27日）.

[17] 同上資料，46頁.

[18] 横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課の新野勉氏からのメール（2022年６月23日）での情報提供による．なお，新野氏によれば，松山市の「フィールドミュージアム」を参考にしたのではないかとの事であった.

[19] 前掲註16，2-3頁参照.

[20] 横須賀市編『別冊　よこすかルートミュージアム』（横須賀市，発行年不詳），３頁参照．横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課の新野勉氏からの提供資料（2022年６月22日）による.

[21] フランス人技術者バスチャンが設計したもので，富岡製糸場に現在も残されている建物の特徴である「木骨れんが造」（木材の骨組みにれんがを積み上げる工法）や，従来の日本にはなかった屋根の工法である「トラス工法」は，1870（明治３）年までに横須賀製鉄所内に建てられていた副首長のティボディエ官舎をはじめ，横須賀製鉄所内にあった建物の中に，その原型を見ることができる．前掲註16，17頁及び横須賀市HP「横須賀の誇り！横須賀製鉄所（造船所）」の内，「横須賀製鉄所と富岡製糸場」参照.
（https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2120/seitetsuzyo/main.html）2022年７月28日閲覧.

[22] 前掲註20，７頁参照.

[23] 同上，２頁参照.

[24]「YOKOSUKA Raute Museum」のHP参照.（https://routemuseum.jp/，2022.8.12閲覧）.

[25] 前掲註11の聞き取りによる.

[26] 横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課の新野勉氏からの聞き取り（2022年８月2-4日の横須賀調査時）による.

[27] 横須賀市教育委員会生涯学習課編の猿島砲台跡と千代ヶ崎砲台跡に関わるパンフレット「史跡東京湾要塞跡　猿島砲台跡　千代ヶ崎砲台跡」（横須賀市教育委員会生涯学習課，発行年不明）参照.

[28] 横須賀市教育委員会編「史跡東京湾要塞跡　猿島砲台跡　千代ヶ崎砲台跡　保存活用計画」（横須賀市教育委員会，2017年），1-2頁及び横須賀市教育委員会編「史跡　東京湾要塞跡　猿島砲台跡　千代ヶ崎砲台跡　整備基本計画」（横須賀市教育

Akita University

委員会，2018年），1頁参照.

[29] 横須賀市教育委員会生涯学習課文化財係の川本真由美氏からの聞き取り（2022年８月2-4日の横須賀調査時）による.

[30] 横須賀市教育委員会生涯学習課文化財係の川本真由美氏からの提供資料（2022年８月８日）「千代ヶ崎砲台跡活用サポーターの会会則」による.

[31] 横須賀市教育委員会生涯学習課文化財係の川本真由美氏からのメールによる情報提供（2022年８月８日）による.

[32] 前掲脚注２報告書,「Ⅱ　広島の事例」「1. 広島市『被爆体験伝承者』養成プロジェクト」(7-18頁）参照.

[33] 前掲註31の情報提供による.

[34] 前掲註２報告書,「Ⅱ　広島の事例」「1. 広島市『被爆体験伝承者』養成プロジェクト」(7-18頁）参照.

[35] 前掲註３報告書,「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」「2. 2016（平成28）年度　広島市「被爆体験伝承者」講話と長崎市「『語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言)』推進事業」」(39-86頁）参照.

[36] 横須賀市教育委員会生涯学習課作成チラシ「ボランティアガイド第２期生募集！　千代ヶ崎砲台跡　活用　ボランティア養成講座」の裏面掲載「講座プログラム」参照.

[37] 前掲註29の川本真由美氏からの聞き取りによる.

[38] 前掲註34参照.

[39] 前掲註35参照.

[40] 前掲註４の報告書の内,「Ⅲ　戦争体験の「語り」の継承－「くにたち原爆体験伝承者」育成プロジェクト－」(129-160頁）参照.

[41] 前掲註29の川本真由美氏からの聞き取りによる.

[42] 南風原町にある沖縄県陸軍病院南風原壕は，1945（昭和20）年３月24日に沖縄県師範学校女子部・県立第一高等女子学校の生徒（ひめゆり学徒）222人が，教師18人とともに看護補助要員のとして動員された地である．また，1990（平成２）年には，その第一外科壕群・第二外科壕群を全国で初めて町指定文化財に指定した地としても知られている．前掲註２の報告書の内,「Ⅳ　沖縄の事例」の「4. 南風原町『南風原平和ガイド養成講座』」(69-78頁）参照.

[43] 養成ガイドの講師も務める南風原文化センター学芸員の上地克哉氏によれば，むしろ独学による危険性を避けるために，きちんとした史実の裏付けのある「シナリオ」を用意しているのだという．2013（平成25）年９月に伺った南風原文化センター学芸員上地克哉氏からのインタビューによる.

[44] 横須賀市教育委員会事務局教育総務部生涯学習課編『史跡東京湾要塞跡　猿島砲台跡　千代ヶ崎砲台跡』（横須賀市教育委員会事務局教育総務部生涯学習課，発行年不明）及び前掲註28参照.

[45] 横須賀市教育委員会生涯学習課の野内秀明氏からの提供資料（2022年８月５日）による.

[46] 横須賀市立馬堀小学校編『まぼり　創立50周年記念・副読本』（横須賀市立馬堀小学校，2001年），15頁参照.

[47] 横須賀市立馬堀小学校校長塩野谷純香校長及び４年生総合担当の中村晴美教諭からの聞き取り（2022年８月２日の学校訪問による調査時）による.

[48] 横須賀市立神明中学校熊谷健太郎教諭からの聞き取り（2022年８月３日の学校訪問による調査時）による.

[49] 同上.

[50] 同上.

[51] 横須賀市立常盤中学校工藤圭介教諭からの提供資料「第１学年　総合的な学習の時間年間計画」（2022年８月３日の学校訪問による調査時）による.

[52] 同上.

[53] 横須賀市立常盤中学校工藤圭介教諭からの提供資料のワークシート「私たちのまち　横須賀･猿島」（2022年８月３日の学校訪問による調査時）による.

[54] 同上.

[55] 横須賀市教育委員会編『中学校社会科副読本　郷土横須賀』（横須賀市教育委員会，2022年），「あとがき」参照.

[56] 同上,「まえがき」より引用.

[57] 拙著『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究－『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として－』（NSK出版，2004年）参照.

[58] 横須賀市立常盤中学校工藤圭介教諭からの聞き取り（2022年８月３日の学校訪問による調査時）による.

[59] 実際に，筆者が案内していただいた千代ヶ崎砲台跡における元横須賀市教育委員会生涯学習課の野

Akita University

内秀明氏の見解もそうであるし，猿島砲台跡でのガイドの方の案内でも同様であった．野内秀明「文化財レポート　東京湾要塞跡　猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡」日本歴史学会編『日本歴史』第818号，（吉川弘文館，2016年），83-90頁，野内秀明「日本の戦争遺跡33　軍事都市・横須賀の戦争遺跡　神奈川県横須賀市」「月刊社会教育」編集委員会編『月刊社会教育』2022年５月号，（国土社，2022年），54頁参照．

[60] 土崎空襲とは，1945（昭和20）年８月14日午後10時半ごろより翌15日未明にかけて約４時間にわたり行われた夜間空襲で，「日本で最後の空襲」と呼ばれている．攻撃目標は，当時日本で最大の産油量をあげていた雄物川河口に立地された日本石油製油所であったが，近隣の民家も多大な被害を受けた．B29を中心とした爆撃機約130機により12,000発を超える爆弾が35フィート（約11m）間隔で投下され（国内での空襲では，最大投下数とも言われている），目標である日石は壊滅するとともに，死者数は非戦闘員93名（日石職員，市民，警察など），兵士の約160人（高射砲中隊員，機関銃隊員など）の計250名ほどにも上った．秋田市編『秋田市史　第五巻　近現代Ⅱ通史編』（秋田市，2005年），183-188頁参照．

[61] 前掲註１報告書の内，「Ⅳ　土崎空襲を事例とした学習材としての活用」（39-90頁）参照．

[62] 例えば，竹内久顕『平和教育を問い直す－次世代への批判的継承－』（法律文化社，2011年）参照．

Summary

The outline of this paper, including the "purpose of this research", is described below. This research is research on war relics that we have been promoting since 2009 , research on the inheritance of "narratives" of war experiences promoted since 2012, research on the development of "peace education for the next generation" using inherited archives that we have been working on since 2015, This is a continuation of research on the construction of "next generation peace education" using inherited archives in regions that we have been working on since 2018 and the successive archives in regions that we have been working on since 2022, and we will present a part of them.

Seventy-seven years have passed since the end of the war, and if the age at the end of the war to talk about the war experience is 10 years old, the population is no longer less than 5% of the total population. Under these circumstances, attempts to preserve and pass on those precious experiences and memories continue in various regions of the country and in various ways. Furthermore, in the field of education, rather than "narrating" directly about the war experience, practices that should be called "peace education for the next generation" are being developed one after another, so to speak, utilizing such inherited archives.

In light of this situation, this paper will clarify the characteristics of the educational utilization of local war relics in particular, taking up the case of Yokosuka City, Kanagawa Prefecture, and comparing the efforts of Yokosuka City's government-led initiative and the utilization in local school education with the efforts of Tateyama City in Chiba Prefecture and the cases of Hiroshima City and Nagasaki City, which were taken up in 2019.

Key Words : War Relics, Yokosuka City, Route Museum

（Received December 22, 2022）